花柳病ノ積極的豫防法

第十一軍第十四兵站病院
陸軍軍醫少尉　麻生徹男

目次

一、緒言
二、娼婦
三、檢黴
四、アルコール飲料
五、禁慾
六、花柳病ノ認識
七、狹義ノ豫防法
八、患者ノ取扱
九、結言

一、緒言

或ル疾病ニシテ患者及ビ其ノ周囲ノ者ニ関聯スル利害関係ガ大ナレバ、其ノ疾病ノ社會的意義ハ大イナリト言フ可シ。此ノ意味ニ於テ花柳病ハ其ノ平時、戰時タルヲ問ハズ、急性傳染病ハ別シテ、結核ニ劣ラヌ重要性ヲ有スルモノナリ。サレバ其ノ撲滅ノ目的貫徹ニハ今日マデ考察セラレタル諸種対策ノ中、一小部分的固執ニ小部分的欲除モ不可ニシテ、宜シク全面的充實ヲ期セザル可カラズ。

即チ目的トスルハ、既患者ヲ治療シ、健康者ヲ傳染セザル如クスルニ外アルヲ以テ、既患者、健康者各個ヘノ治療豫防ノ諸問題ト共ニ其ノ対社會的因子ノ調査研究ヲ必要トス。傳染源、病種別、轉歸別、等ノ頻度数量ノ統計的觀察ヲ爲シ、將来ヘノ

対策ニ資スル所有ラザル可カラズ。而シテ此等ノ内、人アリテカ或ル物ヲ積極、或ル物ヲ消極ナリト區別スル趣キアルモ、本症ノ如ク重大社會性ヲ有スル疾病ニ於テハ總テ対策ガ平等ナル發言權ヲ有スルモノナリ。

二、娼婦

昨年一月小宮上海郊外勤務中、一日命令ニヨリ、新ニ奥地ヘ進出スル娼婦ノ検黴ヲ行ヒタリ。コノ時ノ被検者ハ半島婦人八十名、内地婦人二十名余ニシテ、半島人ノ内花柳病ノ疑ヒアル者ハ極メテ少数ナリシモ、内地人ノ大部分ハ現ニ急性症狀コソナキモ、甚ダ如何ハシキ者ノミニシテ、年齢モ殆ド二十歳ヲ過ギ中ニハ四十歳ニナリントスル者アリテ既往ニ賣淫嫁業ヲ数年経来シ者ノミナリキ。半島人ノ若年

齢且ツ初心ナル者ノ多キト興味アル対象ヲ為セリ。
ソハ後者ノ内ニハ今次事変ニ際シ應募セシ未教育
補充トモ言フ可キガ交リ居リシ為メナラン。
一般ニ娼婦ノ度ハ若年齢程良好ナルモノナリ。即チ
「ミユンヘン市ニ於ケル検査ニテハ、二六八六人ハ娼婦中ノ花
柳病ニ罹レル者ハ二六、五%ニ及ビ年齢別ニセバ

十六歳以下ノ者	一九
十六歳—十八歳	一〇四
十八歳—二十一歳	二三九
二十一歳—三十歳	二八一

且ツ該市未成年者ニシテ三ヶ年間ニ判決サレシ年
若キ娼婦ノ中ニテ花柳病ヲ受ケ居タリシ者ハ

十五歳	五五、〇%
十六歳	六一、五%

十七歳	六八、六%

ニシテ若年程罹患率ハ少ナリ。又スツドガルトノ
娼婦五六五人ニテハ

十四歳—二十一歳	五五、〇%

「ミユンヘン市ニ於テハ一九〇八年ニ三、五%、同リー市ニ
於テハ五八、〇%トナレリ。又昭和七年福岡縣ニ於ケ
ル年齢四十歳マデノ調査ニテ、二十歳以下ノ者ノ数ハ

藝妓	五六、三%
娼妓	二九、一%
酌婦	四四、六%
女給	四六、五%

ヲ示セリ。即チ娼婦ノ約半数ハ年齢二十歳以下
ノ者ト言フヲ得ベシ。故ニ若年ノ娼婦ニ保護ヲ加
ヘル事ガ重要ニシテ、意義アル事ナリ、サレバ戰地

(複写禁止)

へ送り込マレル娼婦ハ年若キ者ヲ必要トス。而シテハ官某地ニテ検徴中屢々見シ如キ両鼠蹊部ニ横痃手術ノ瘢痕ヲ有シ明ラカニ既往花柳病ノ烙印ヲオサレシ、アバズレ女ノ類ハ敢ヘテ一考ヲ與ヘタシ。此レ皇軍將兵ヘノ贈リ物トシテ、實ニ如何ハシキ物ナレバナリ。如何ニ検徴ヲ行フトハ言ヘ。

一應戰地ヘ送り込ム娼婦ハ内地最終ノ港灣ニ於イテ、充分ナル淘汰ヲ必要トス。マシテ内地ヲ喰ヒツメタガ如キ女ヲ戰地ヘ輸送ヘサス如キハ、言語道断ノ沙汰ト言フ可シ。

此レト類似セル問題トシテ現地支那ノ娼婦及ビ難民中ノ有病貴賤者ヘノ徴毒性疾患ノ浸潤驚ク可キモノアルガ如シ。此レ等ニ対シテハ軍トシテ若シ必要ナラ軍用慰安所トシテ我ガ監督下ニ入ルカ、

然カラザル者ニ対シテハ断乎トシテ処置ス可キナリ。独乙ケルン市ノ守備兵間ニ一時花柳病ガ蔓延シ、特ニ厳重ナル検徴モ効果ナク罹患者三%ト言フ高率ヲ示セリ。此レ即チ私娼ノ跋扈ニヨルモノナリキ。此ノ為メ該市ニテハ英米ノ先例ニナラヒ女警官ヲ置キ、コノ粛正ニアタラシメ著効ヲ奏シタリト言フ。ココニ注意ス可キハ支那娼婦ノ内或ル者ハ豫防法殊ニコンドーム使用ヲ忌避シ、其ノ甚シキハ之レヲ破棄スト。此レ敵ノ謀略ニヨリ戰力ノ消耗セラルヽト同一結果タリ。

三、検徴

花柳病蔓延、容易ナル傳染及ビ其ノ撲滅ノ困難ナル重大原因トシテハ淋疾ノ根治シ難キニアリ。シカモ此レガ一度ビ婦人ノ下腹諸臓器内ニ喰ヒ込ミシ場合ヲ考ヘ

ンカ、思ヒ半バニ過ギルモノアラン。サレバ検徴ハ無効ノモノナランカ。今日マデノ文献ニ徴スルニ所謂検徴制度ヲ有スル公娼ト密淫賣ヨリ受クル感染率ハ両者相伯仲シ、アタカモ検徴無用論ヲ証明セル如キ感アリ。サレバ小官ハ今此所ニ検徴ニツキ一考察ヲ與ヘ見ン。

其ノ歴史的起源ハ古ク、既ニ一六二年倫敦市外「サウスワーク」ノ遊廓ニ対スル「ウインチェスター」僧正ノ命令書ナルモノアリ、一四三年及ビ一四六九年ニ「チューリッヒ」及ビ「ルッチエルン」市會ノ之レニ関スル規定アリ。其ノ後一八二八年ニ至リ巴里市ニ於テ娼婦ノ登録ヲ行ヒ、之レヨリ醫師ノ監督ヲ受ク可ク統制セリ。カクテ今日ノ検徴制度ノ基礎確乎ヲ見タリ。

然ルニ一九〇八年「ヘヒト」ハ其ノ賣淫者ノ一小部分、即チ僅々五%或ハ一〇%ニシカ及バザルガ如キ検徴

ハ全ク無用ナリト唱ヘ出セリ。彼ノミナラズ今日ニテモ無用論ヲ唱ヘル者少シトセズ。彼等ハ登録娼婦数ハ賣淫婦全体数ニ比シ全ク少数ナリト言ヘリ。

数ノ判明セル、伯林、「ケルン」、巴里市等ニテハ此レ等密淫者ハ公娼ノ七乃至十倍ニ達セリト。恐ラク今日ノ日本内地ニテモ同様ナラン。然カモ今戦地ニテモ其ノレト類似セル現地密淫者ノ出没ヲ認メ得ルモ、大局ヨリ見軍ハ其ノ統制下ニ置ク特殊慰安所ヲ設置スル故此ノ検徴用論ハ全ク適用サレズ、且ツ最近ノ報告ニヨレバ「ニエルンベルヒ」及ビ「ボヘミヤ」ニテ頻回ナル検徴ガ効ヲ與ヘタリト言フ。而シテ検徴ガ有効ナリトテモ、其ノ當ヲ得ラズバ更ニ一歩ノ進メル敵ナ害ヲ生ム。即チ検徴効果ノ衛生的全幅的發揚ヲ望マバ、其ノ後ニ来ル罹病者ノ隔離、治療コソ必須ノモノナレ。

此レヲ俾パザル検徴ハ全ク有名無實ノ甚ダシキモノナリ。小官ハ某地在勤中此ノ疾痛切ニ感ゼシモノナリキ。此ノ頃マデハ軍ニハ此レニ対スル一定ノ方針無ク唯出来得ル所ニテハ大都市ニアル地方人医院ニ治療ヲ依頼スルニ止マリ居レリ。其ノ後一年有半ハ過ギ小官モ該検査ヨリ遠ザカル事永キニ亘ルヲ以ツテ目下ノ状況ニハ詳ラカナラザルモ、此ノ検徴ノ後ニ来ル治療ノ徹底無キトセンカ、ソモ検徴ハ何ノ為メゾ。宜シク軍ハ此ノ為メニモ一ツノ確タル統制ヲ必要トス。次ギニ有リ得ベカラザル事ナルガ検徴ノ弊害トシテ見逃セ得ザル一事アリ。即チソノ検査者ト営業者乃至被検者間ノ情實問題ナリ。コノ有名ナル例トシテ欧州ニテハリール事件アリ。蓋シ闇ノ世界ノ背後ニ立ツ者ハ時ニ侮ル可カラザル權力ヲ有スル事アリ。

少クトモ軍用特殊慰安所内ニテハカクノ如キ事實ハナシト思フモ、吾人ニハ之レヨリ教ヘラルル事ハ多々アリ。即チ検査監督ノ位置ニアル者ノ個人的登楼或ヒハ接娼ノ如キハ一考ヲ要スル可キ問題ナリ。マシテ其ノ職權ヲ濫用シ其ノ間何事カ畫策スル所アルハ遺憾千万ナリ。又單ニ好奇心ヲソヽリ、其ノ道ニ全ク無定見ノ者、検査ヲ行フ如キハ言語道断ト言可シ。

更ニ娼婦ノ検査ト共ニ妓楼ノ検査モ必要トス。小官某地勤務中ニチ所ノ妓楼ノ検査ヲ行ヒタルガ其ノ一ツハ新ニ軍用特殊慰安所トシテ建造セル、バラック式家屋ニシテ各室ニ洗滌所ヲ有シ、切符發賣所、出入口其ノ他ノ諸設備殆ンド理想ニ近ク他ハ支那家屋ヲ利用セルモノニシテ其ノ室區分、

洗濯所等ノ諸設意ノ如ク行カズ、果セル哉其ノ開設后両地ニテ罹患セリト称スル患者ハ極ク少数ナリトハ言ヘ、甚ノ後者ニテ殆ド占メラレアリシハ注目ニ値ス。斯クスル事ニヨリテ検徴ノ成績ハ統制下ニアル軍用妓楼ニ於テハ擧ゲ得ルモノナリ。然レドモ甚ノ成績ヲ過信シ、一般兵間ニ賣淫危険ヲ軽視サス可カラズ。

四、アルコール飲料

古来酒ト女ハ附キモノト言フ可シ。酒ハ百薬ノ長ニハアレ、凡ソ「アルコール」ノ薬理的作用ノ人体ニ及ボス第一期ニ於テ、抑制作用ガ無クナリ、従ツテ道徳的批判能力ガ落ケ目トナル。カクテ平素、素面ニテハ能ハザル者ニテモ平気ニテ花柳ノ巷ヘ

歩ヲ入レ得ル結果トナル。又「ポテンツ」ガ下ル故、行為時間モ永クナル、斯クテ自ラ花柳病罹患ノ危険ニ身ヲ曝ス事態ヲ招来ス、且ツ所謂酒機嫌ト言フ代物ニテ、万事気ガ大トナリ、豫防的操作、豫防剤ノ使用ヲ放擲ス。「ロムホルト」ニヨリ「アルコール」ハ保護剤ノ使用ヲ喜バズ」ト報告セラレアルガ、寡ニ宜シナル哉。「アルコール」ト花柳病トノ関係ハ近来諸方面ニテ調査セラレ、「オーレル」ニヨレバ、一八二人ノ男子ニテ「アルコール状態」ニテ花柳病ヲ得シモノハ、七六、六%「ラングスタイン」ニヨレバ一七九人ノ女子ニテ四三、八%更ニ「メーラー」ハ一二五人中一七、七%「ヘヒト」ハ約一〇〇〇人中ニテ四三、〇%ト報ゼリ。更ニ興味アルハ「ワイン」ガ七〇〇名ノ男子ニツキ調査セル所、独身者ニテ三〇、〇%妻帯者ニテ五〇%

トナレリ。之レ即チ妻女子アリ、分別アル男ハ列底酒無シニ斯クノ如キ冒険ハ敢ヘテ為シ得ザルモノナラン。軍隊ノ娯楽所ヨリ「アルコール」ヲ遠ザケバ著シク花柳病ガ減少スト英國ノ軍隊ノ統計ガ示セリ。即チ收容患者一〇〇〇人ニ対スル割合ハ

年次	アルコール性疾患	花柳病
一八八六—一八九〇	三、一	二〇七、六
一八九一—一九〇〇	二、一	一四三、七
一九〇一	二、六	九五、六
一九〇二	二、六	一一〇、一
一九〇三	一、五	一〇九、一
一九〇四	一、三	一〇七、六
一九〇五	一、二	九〇、五
一九〇六	一、七	九九、四

一九〇七	一、四	八四、四
一九〇九	〇、七	六八、四
一九〇一—一九〇九	一、八	一〇二、六
一九〇六—一九〇九	一、二五	七九、四

之レニヨレバ「アルコール」ニ因ル疾病ガ減少セバ花柳病亦減少スルガ明白トナレリ。又「ストッダート」ノ報告ニヨレバ、「マッサチューセット」州ニテハ禁酒令發布以来花柳病ノ数ハ低下セリト。「イクテマン」ノ報告ニヨレバ「レイニングラド」ノ花柳病傳染ノ二五、〇%ハ飲酒ノ結果ナリキト。然ルニ才未國ノ軍隊ニテ一九〇〇年以来酒保ニ於テ「アルコール」飲料ヲ全ク嚴禁シタル結果、士卒ハ止ムナク酒場ヤ、カフエーニ行ク狀態トナリ、却ッテ花柳病ノ増加ヲ見シト言フ、此ノ点細心熟慮セザレバ龍頭蛇尾ノ類トナル。何レニセヨ花柳病ノ傳播ニアル

コールヒハ重大ナル役割ヲ有スル事實ハ何人モ否ムヲ得ズ。然カモ一旦罹ツタ花柳病ノ經過ニ及ボスアルコールヒノ影響ヲ考ヘ見ルナラ、其ノ思ヒ半バニ過グルモノアラン。

小官ハ此ノ見地ヨリ軍隊内ニテ最小限度ノ酒ノ消費セラレン事ヲ切望スルモノナリ。增シテ今日マデ軍隊内諸事故ノ大部分ガ所謂「酒ノ上カラ」ナル事實ハ此ノ確信ヲ益々強固ニスルモノナリ。

軍用特殊慰安所ハ享樂ノ場所ニ非ズシテ衛生的ナル共同便所ナル故、軍ニ於テモ慰安所内ニテ酒類ノ禁止サレアルハ寧ロ当然ノ事ナリ。然レドモ小官慰安所監視中屢々酒類飲用ノ跡ヲ見シハ甚ダ遺憾トスル所ナリ。此ノ爲メニモ営業者ノ監視、娼婦ノ監督、引イテハ之レ等ノ教育指導ヲ

必要トスル。

五、禁欲

禁欲ハ有害ナリト言フ者アリ。彼等ハ性欲禁忌現象マデ四維列シ、其ノ有害ヲ説ク。小官ハ思フ、性欲ト精力トハ個人々々ニヨリ非常ナル相違アリト、或ル者ニテハ其ノ強クモ非ラザル色欲ヲ抑制スルニ、尤程意志ノ力ヲ籍ラザルモ可ナルガ、或ル者ニテハ性欲ガ強烈ニテ如何ニシテモ之レヲ抑壓シ得ズト言フガ如シ。禁欲ガ有害ニシテ其ノ結果生殖器神経衰弱症ヲ起シ攝護腺腫大ヤ所謂色情性副睾丸炎等ヲ惹起セシ實例ガ果シテ幾何アリヤ。

要スルニ、禁欲ノ目的貫徹如何ハ衛生的生活法ヲ前提トス。勤勉営々トシテ働キ傍ラ適当ナル慰

安ノ道ヲ講ジ、色慾ノ乖ズル隙ヲ作ラヌガ第一條件ナリ。此レ各個人ノ品性、性格、信念等ニテ尤右セラルヽ問題ニシテ些カ抽象論トナルヲ以ッテ更ニ述ブルヲ得ズ。小官一人ノ考ヘヨリセバ、想ヒヲ一度ビ東亜百年ノ大計ノ上ニ走ラサバ此所一年、三年ノ林示慾尚餘リ有リト言フ可シ。

六、花柳病ノ認識

凡ソ敵ヲ殲滅セント欲セバ敵ヲヨク知ラザル可カラズ。対花柳病戰ニ於テモ亦然リ。敵ノ兵力、毒力ニ無智ナル可カラズ。独リ軍隊内ニ於テノミナラズ娼婦ニ対シテモ充分ナル認識ヲ與フルヲ要ス。

「レウセル」ハ娼婦監督ノ改善ニ努メ、一法ヲ提案シ之レヲ賣淫規律ト命名シ、之レヲ以ッテセバ娼婦ノ

花柳病ヲ減少セシメ得ルトセリ。思フニ之レハ独リ娼婦ノ爲メノミナラズ、彼女等ノ用益者達ニモ利スル所多大ナラン。即チ常ニ性交ノ冷静ナル目擊者ハ彼女等ヲ他ニシテハ決シテ求メ得ザルモノナリ。此ノ意味ニ於テモ軍用慰安所ノ娼婦ハ常ニ監督指導スルヲ必要トス。

更ニ彼女等ノ用益者タル男子側ニ於テモ其レヨリモ一層ノ認識ヲ必要トス。俗ニカサ気ト色気無キ男ハ無シト言ヒ、欧州諸國ニ於テモ十六、七世紀頃ニハ黴毒ヲ恥トセズ已ノ病氣情事ニ就キ語ルヲ名譽ノ如ク心得居タリト。

慢性淋疾ノ如何ニ治療シ難キカ、一旦腦神経細胞中ニ喰ヒ入リシ「スピロヘータ」ノ如何ニ其ノ生命力ニ影響ヲ有スルカ、独リ個人ノ問題ノミナラズ、家庭、

子孫、引イテハ民族ノ素質ノ低下ニマデ及ズ因果ヲ持ツモノナリ。思ヒヲ此所ニ致サバ吾々医学ヲ修メシ者ニ非ズトモ慄然ヘタルモノアラン。

此ノ故ニ軍隊内ニ於ケル性教育ノ徹底ハ重且ツ大イル問題ナリト言フヲ得ベシ。近時米國ノ軍隊ニ於テハ、コノ為メ宣傳ビラ、小冊子等ノ配布、及ビ寫眞、殊ニ活動寫眞ニヨリ著効ヲ収メツヽアリト言フ。

此ノ花柳病ニ対スル啓蒙運動コソ一ツニ隊附衛生部員ニ課セラレタル重大任務トモ言フヲ得ベシ。

七、狭義ノ豫防法。

狭義ノ豫防法ニツキ一言スル前ニ、軍隊内ニテ屢々見ル包茎ノ問題ニ言及セント欲ス。即チ今日マデ花柳病豫防ノ為メ多数ノ包茎者ニ就キテ手

術ヲ行ヒタル例ハ無キヲ以ツテ昔ヨリ見ル宗教的切除者ト非切除者ニツキ罹病率ノ比較ヲ行フ。

「ブライテンスタイン」ガ蘭領印度ノ軍隊ニテ調査セル所ニヨレバ一五〇〇〇ノ土人即チ包皮ヲ切除セル兵卒ニテハ花柳病一六、〇%ニテ其ノ内黴毒ハ〇、八%ナリシモ、一八〇〇〇人ノ欧州人即チ切除セザル兵士ニテハ花柳病ハ四、〇%ニテ其ノ内黴毒ハ四一%ニ達シ居レリ。

又「ロエブ」ニヨレバ二四六八人ノ患者ニテ非切除者ノ三九、一%ハ下疳ト黴毒ヲ有セシガ切除者ニテハ一五、〇%ニ過ギズト。

確カニ包茎ヲ有スル者ノ除茎ハ不潔ニナリ易ク亀頭ニテ湿潤ニテ病菌ノ良キ培床トナル事ハ肯定出来得ル。

故ニ斯クノ如キ者ハ出来得ベクンバ壮丁検査ニ引キ續キカ、入営直後ニカ治療ヲ加ヘ、以ツテ花柳病

豫防ノ遠大ナル計畫ノ一助トモ為シタシ。

次ギニ軍隊内ニ於ケル狹義ノ豫防法ニ就イテ言フスルガ抑々花柳病ノ發生率ハ平時ノ軍隊ト戰時ノ軍隊トニテ頗的ニモ量的ニモ大イニ趣キヲ異ス。例ヘバ米國ノ軍隊ニテ大戰前マデ一六、〇%ナリシガ既ニ動員直后ニハ四〇、〇%トナレリ。增シテ戰場倥偬ノ間ニ於テオヤ。其ノ豫防法ニ至リテハ今日マデ洋ノ東西ヲ問ハズ略同一ニシテ藥物保護劑ニヨルモノ、コンドームニヨルモノ或ヒハ之等ヲ併用スルモノ及ビ交接后ノ洗滌、消毒ニヨルモノ等アリ。小官ハ之等總テヲ勵行スルヲ以ツテ本則ト致シタシ。

之レニ使用スル具体的藥品ノ組成其ノ他ハ實ニ多種多様ナル故、今此所ニ逐ベ得ザルモ、要ハ信用セラル可キ品物ヲ選定ス可キニ有リ。

衛生材料廠ヨリ受領スル場合ハ別トシ時ニ民間製品ヲ補給セラルヽ事有ルヲ以ツテ、此ノ点特ニ注意ヲ必要トス。最近或ル種ノ品ニテ局所刺戟過大ニシテ使用ニ耐ヘズト訴フルヲ散見セシヲ以ツテナリ。又コンドームモ近時殆ド硫化ゴム製品トナリ品質モ向上セシヲ以ツテ良好ナルモ、中ニハ保存永キニ亘レバ脆弱トナルモノアリ。注意ヲ要ス。内地ニテハゴム製品ノ統制アリト言フ、唯ニ自動車タイヤ用トシテノミナラズ、此ノ爲メニモ良質ノ原料ヲ得、製品粗悪ナラザル如ク勉メザル可カラズ。

交接后ノ洗滌、消毒ニハ保護劑ノ残餘或ハ消毒石鹸、其ノ他ノ液ヲ使用スルモノアリ、然レドモ肝心ノ此ノ処置ヲ行フ可キ適当ナル場所ヲ何レカノ地ニ求メルヲ要ス。ソハ娼家ノ内ニテカ或ヒハ外ニテカ。

凡ソ交接后消毒ノ時間ガ早ヤケレバ早キ程罹病率ハ少ナリ。此レ當然ノコトナラン。即チ和蘭海軍ニテ得タル結果ヲ參照セバ

經過セシ時間	罹病者率
一時間	〇、〇八%
二時間	〇、五五%
三時間	〇、七七%
五時間	一、五七%
七時間	二、一七%
九時間	三、六二%
十時間以上	七、四〇%

トナリ、如何ニ交接後ノ豫防的消毒ガ必要ナルカヲ知ル。欧米ノ軍隊内ニテハ此ノ消毒所ヲ兵舎地等ニテハ街ノ中ニ共同便所式ニ設ケ、或ヒハ兵舎内ニ設

ケシ例アルモ小官ハ前述ノ理由ニヨリ娼家内、然カモ交接ノ各室毎ニ設ケタレ。此ノ点ニ於昭和十三年春開業当時ノ上海旧軍工路附近楊家陸軍尉官安所ノ設備ハ理想的ニ完成シアリキ。

当時消毒藥ハカメレオン水ヲ使用セリ。娼家ノ内ノ唯一ヶ所ヲ之レニ宛テル如キハ小官ノ取扱ヒシ範圍ニ於テハ不適当ナリキ。

斯クノ如クシテ行ハレタル豫防法ノ結果ハ果シテ有効ナルモノナランカ。米國海軍ニ於ケル成績ハ注目ニ値ス。一九〇七年頃同國ニ於テハ各々ノ隊ニ任意ニ行ハシメ居タリシガ、一九〇九年ニハ数ヶ所ニ強制的ニ實行セシメタリ。一九一六年米國海軍ニ於籍ヲ置ク者ハ花柳病ニ罹レル場合及ビ自己ノ不謹慎ヨリ疾病ヲ得タ場合ハ其ノ治療期間中

ハ給料ヲ與ヘザルコトニセリ。又豫防法ハ次ギノ如キ規定トセリ、即チ豫防具ヲ携帯セル場合ハ別トシ、然ラザル者ハ歸艦后、或ヒハ道順ノ便利ナル地ニ設ケラレタル場所ニテ衛生部員ノ監視下ニ消毒ヲ受クベシト。此ノ方法ヲ勵行セシガ爲メ一九一〇年以降花柳病患者數ハ減少セリ、然カモ一九一七、一九一八年ハ大戰中ナリシモ拘ハラズ急激ニ其ノ數ヲ減少シ得タリ。コレ戰時ニ対スル當局処置ノ宜シキヲ得タル。結果ト言フ可シ。

又「ライド」ノ報告ニヨレバ一九一七年ホーフマス守備兵間ノ花柳病數ハ九二%。トナリ、「ボイデン」モ此ノ方法ニテ好成績ヲ得、九二三人ノ内淋疾ハ一人モナク、黴毒ガ唯一例ナリキト報告セリ。倫敦ニ於ケル一軍隊ニテモ同様ナル方法ニテ一九一三年花柳病患者

九五、六%ナリシヲ一九一七年末ニハ三五、〇%ニ減少セシメ得タリ。同様「シンガポール」ノ駐屯軍内ニテハ豫防法採用以来一五、八%ヨリ三、四%ニ減少セシメ得、又「サンギオルギ」ニヨルト伊國ニテハ豫防用軟膏ノ使用ヲ勵行セシヨリ、一九一六年ノ五六%ヲ一九二三年ニハ三二%ニ減少シ得タルト言フ。

兎モ角モ此レ等豫防的処置ハ確カニ有効ナルモノナリ。然シ此レガ爲メニ、其ノ効果ヲ過信シ誤マリシ安全感ヲ持ツ必要ハ断ジテナイ。

八、患者ノ取扱

一旦花柳病ニ罹リシナラバ可及的早ク早期治療ノ徹底ヲ遂行セザル可カラズ、小官在南京中、兵站病院外来患者治療時、屢々患者或ヒハ

隊附衛生下士官兵ヨリ花柳病藥ヲ当方ノ治療ニ使用セシ量以外ニ餘分ニ請求スル傾キアリ。此ノ原因ヲ探索セシニ、一ツハ彼等ガ自己ノ疾病ヲ隊附軍醫ニ知ラルヽヲ恐レシ、一ツハ軍醫中ニモ自己監督ノ隊内ニテ斯クノ如キ藥物ノ消費セラルヽヲ好マズ、引イテハ患者自身ガ自費ニテ藥物ヲ購入スルカ、或ヒハ前記ノ如キ傾向トナリテ現ハレタルモノナリキ。

花柳病ノ治癒ノ決定ハ常ニ困難ナル問題タリ。然レドモ目下当地域内ニ於テハ從来ノ如ク、中支醫部第四五号ニ定メアル如ク行フヨリ他ニ方法ヲ得ズ。更ラニ中支醫部第五号、中支兵監醫第八五号ニヨル花柳病患者調査表ノ如キモ今后一層強化サレ、各作戰期毎ノ組織的統計的觀察モ必要ナリ。

此ノ際問題トナルハ所謂「花柳病士卒ノ特典」ト言フ事ナリ。即チ彼等ハ花柳病患者トシテ收容セラレ、一戰鬪期間生命ノ安全ヲ保証セラル。

實ニイマノヽシキ限リナリ。彼等ノ戰友ノ平素眞面目ニシテ花柳病ノ汚レニ染マザル者ハ身ヲ彈丸雨飛ノ中ニ曝セル間、彼等ハ「サルバルサン」ヤ「プロタルゴール」ヲ友トシ、安逸ナル病院生活ヲ爲シ居レリ。然カモ彼等ノ病院内ニ於ケル起居動作ハ決シテ良好ナラズ。サレバ「ヘヒト」ハ黴毒ニテモ林殊ニテモ症狀ガ消失セバ直チニ戰線ヘ送ル可シト言ヒ、且ツ戰線ニ居ル間注射ヲ行ヒ治療ヲ完了スル事モ困難ナラズト追加セリ。「ナイセル」ハ斬壕内デノ「サルバルサン」ト水銀療法ヲ提唱シタルモ、之レハ實現サルヽニ至ラズ。

平時ナラバ数千発ニ一発ノ砲身内破裂ノ危険ヲ防止ス可ク引キ金ニモ紐ヲ附シテ演習シタル室砲モ、實戰場ニ於テハ紐如キ介在物ハ問題トナラズ。サルバルサンニモ千ニ一餘ノ危険無キニシモ非ズ。然レドモ戰場ニ於テハ事態如何ニテ、問題トナラザル時モアルベシ。軍ノ戰鬪力低下ノ防止ニハヤムヲ得ヌコトナリ。

九、結言

今日マデ色々ノ対策ガ世界各國ノ軍隊ニテ試ミラレタリ。陸軍軍醫團發行皮膚及花柳病講義録ニ於テモ詳細ニ論議セラレフイシダル以下十四名ノ人々ノ意見ガ記載シアリ。而シテ此等ハ略同一ノ事ヲ論ジ、小官亦甚ダ等

ト略同一ノ結論ヲ得タルモノナリ。サレド此ノ正當ト思ハル、各対策ノ確實ナル遂行ヲ何時如何ナル場合ニ於テモ達成セント切望スルハ決シテ人後ニ墜ケザルモノナリ。以上各項ニ亘リシ措見ヨリ小官ハ左記諸條目ヲ以テ結言ト爲ス。即チ

一、軍隊内ニ於ケル花柳病ニ関スル教育

花柳病ノ何物タルカヲ認識スルコト必須ナリ。

二、個人的豫防法ノ勵行。

三、局所的精密ナル身体検査

月例身体検査時特ニ注意スルヲ要ス。

四、アルコール飲料ノ制限

即チ此レ代ルモノトシテ、ヨリ高尚ナル娯樂施設ヲ必要トス。音樂、活動寫眞、圖書或ヒハ運動ガ良イ。

思フニ、十六ミリ「トーキー」ニヨル映畫位、ナレク研究セバ、前線近ク各地ニテ行フニ尤程困難ナラズ。娼樓ニ非ラザル軍用娯樂所ノ設立モ希望ス。斯クシテ兵員自ラ禁慾ヲ意トセザルノ良風ヲ養成スル可キナリ。

五、檢徴ハ的確ニシテ嚴正ナル可シ。

更ニ娼家、樓主ノ監督ヲ必要トス。罹患娼婦ノ治療、隔離ハ必ズ行フ可シ。此ノ爲メ兵站地区内ニ於テハ特殊病院ヲ必要トシ、彼女等ニモ後送治療ノ可能ナル如ク全機関ヲ統一シタシ。

六、娼婦ノ質的向上及ビ選擢。

同時ニ私娼ヘノ警戒ト傳染源ノ徹底的追及モ必要ナラン。

七、防疫軍紀ノ嚴守。

前記各項ノ目的達成ハ實ニ軍紀ノ振作、防疫軍紀ノ高揚ニアリ。花柳病対策モ廣義ノ防疫作業タル可ク、將来兵站令部ハ此ノ爲メ更ニ自己ノ医療能力ヲ増進充實セシムルカ、或ハ他ノ有力ナル衛生、防疫機関ニ作業ノ一部ヲ譲渡ス可キナリ。

八、前記各方面ノ諸因子ノ全体的、統計的研究ハ対將来、対社會ノ問題トシテ重要ナル役割ヲ演ズルモノナリ。

昭和拾四年六月廿六日　　以上。